

地域づくりとカフェ活動

—社会的実験としてのコミュニティカフェ—

高瀬 顕功¹、齋藤 知明²

¹大正大学 地域構想研究所 助教

²大正大学 人間学部 専任講師

(要旨) 近年、地域づくりの場としてコミュニティカフェが注目されている。コミュニティカフェは、たんに地域住民の集いの場となるだけでなく、住民同士の相互交流の中で援助希求を早期に発見する場ともなる。本稿では、二つの都市型コミュニティでのコミュニティカフェ実践を通じて得られた知見をもとに、そのノウハウや可能性と課題を提示する。実践から抽出された、継続性、非匿名性などの要素は、場の信頼性を担保し、コミュニティカフェにみまもり機能をもたらす。したがって、地域包括ケアシステムの構築に際し、私領域の重要な実践となる可能性を持つ。

キーワード: コミュニティカフェ, 場づくり, 援助希求の発見, RISTEX

1. はじめに

厚生労働省は、地域包括ケアシステムをさらに進めるかたちで、「地域共生社会」の実現を推し進めている。地域共生社会とは、社会構造の変化や人々の暮らしの変化を踏まえ、制度・分野ごとの『縦割り』や「支え手」「受け手」という関係を超えて、地域住民や地域の多様な主体が『我が事』として参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えて『丸ごと』つながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会と定義される¹。

これは、福祉の分野にとどまらず、教育や労働、外国人や性的マイノリティを含めた多文化共生などあらゆる領域に通底するものであり、ライフスタイルが多様化し、国際化が著しい我が国においても目指されるべき社会のあり方であろう。しか

し、実現のためには、乗り越えなければならないハードルがいくつもある。児童養護施設、救護施設の建設に対し地域住民が反対するNIMBY (Not in my backyard: 必要かもしれないけど、うちの近くではお断り) 問題の典型ともいえるこの騒動は、なかなか解決の糸口が見つからないのも現状である。その一因には、設置者、利用者、地域住民の間の、「地域共生社会」に対するビジョンの不一致がある。

地域に住む多様な住民のニーズをすべて満たすことは難しい。しかし、「地域共生社会」の実現を考えたときに、多様な他者がいることを感じられる場づくりが重要であることは間違いないだろう。そして、その場づくりとして、近年、コミュニティカフェが注目されている(山納洋2016, 倉持香苗2014)。コミュニティカフェとは、地域社会の中での「たまり場」や「居場所」になるスペースのことで、その運営主体は個人やNPO法人、社会福祉協議会などさまざまである。提供されるサービスも多様で、飲食スペースが設けられている他

¹ 厚生労働省 HP より
(<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000184346.html> 2019/1/20 参照)

は、イベントを行ったり、展示スペースを設けたり、地域の住民の手作り品を販売したりと、地域住民の交流を生み出す「集いの場」として、全国各地に広がっている

本稿では、二つの地域でコミュニティカフェを試験的に運営し、その観察を通じて蓄積された、コミュニティカフェの運営のノウハウ、および可能性と課題について論じたい。

なお、本研究はJST社会技術研究開発センター(RISTEX)「安全な暮らしをつくる新しい公/私空間の構築」研究開発領域・都市における援助希求の多様性に対応する公私連携ケアモデルの研究開発の成果の一部である。

2. カフェ実施の経緯

これまで、上記のRISTEXの研究開発の中で、筆者らは「公私の間における潜在的な社会資源の発掘とみまもりモデルの構築」に焦点を当て研究を行ってきた(高瀬2018a; 2018b)。

さらに、地域住民の援助希求を発見する「集いの場」を社会実装するため、2018年より、大正大学の施設である「鴨台花壇カフェ」を活用し、豊島区西巣鴨地域(以下、西巣鴨)において「集いの場」のモデル構築を試みた。川崎市中原区市ノ坪地域(以下、市ノ坪)での援用を見越した上で始まった本実践は、大正大学の授業である「サービスマーケティングⅠ-C、Ⅱ-C(コミュニティカフェの実践)」を受講する学生らと連携しながら進められた。

西巣鴨には市ノ坪と地域の類似性がある。市ノ坪は、武蔵小杉駅から徒歩5分の距離にある地域で、地域内に近年建設された高層マンションも持つ。他方、古くからの住民も住んでおり、また、近隣に学校があることから、学生の往来も多い。したがって、幼児、学生、子育て世代、高齢者と多様な地域住民が同地域に混在している。一方、地区社会福祉協議会や民生委員が主体となった活動はあるものの、対象者が「高齢者」や「母子」と限定されている。このことは、運営主体が公的性格を有する機関のため生じるものでもある。多世代交流を生み出すには、多様な地域住民が集うため

の仕掛けを施した、私領域の「集いの場」を設ける必要がある。

他方、西巣鴨は、都営団地、マンション、戸建て住宅が林立し、高齢者だけでなく子育て世代も多く集住する。近隣には大正大学だけでなく、公私立の初等・中等教育機関もあり、学生の往来も多い。

大正大学は、以前、この西巣鴨でコミュニティスペース「大正さろん」を運営していた²。筆者らも大正さろんの実践に関わってきたが、2012年の閉所後は、その役割は「区民ひろば」などの行政機関のみが担うことになった。したがって、現在の西巣鴨では私領域の「集いの場」が存在していない。

この地域性の共通点から、西巣鴨のコミュニティカフェの実践は、市ノ坪での実装に対して十分に資すると考えた。

また、コミュニティ構築(あるいは再構築)に関して、市民主催のカフェ活動が果たす役割は大きい。筆者らは、従来のコミュニティが解体された東日本大震災の被災地において、宗教者や宗教者ネットワークが仮設住宅や公営住宅の集会所等でカフェ活動を実施し、コミュニティ再構築に貢献した事例を調査した(高瀬・小川2019, 齋藤2019)。

これらの事例では、飲食の提供のほか、ワークショップや体験活動など、主催者と利用者、あるいは利用者間との交流を目的とした実践がおこなわれていた。

被災地におけるカフェ活動で、公領域に関わる機関のみが多様な実践を継続的に準備することは不可能である。カフェ活動の役割を中心に担っていたのは、様々な市民団体やNPO団体などの私領域の組織であった。

都市型コミュニティは、住民の流動性や匿名性が高く、コミュニティの構築が困難といわれる。いわば、被災地仮設住宅のようなコミュニティが解体された状態に近いといってもよいだろう。し

² 2005年、大正大学が出資して設立したNPO法人でもくらしいによって、大学が位置する庚申塚商店会の一角に「大正さろん」が開設された。大正さろんは、地域住民と大学生が交流を図ることで、地域振興の促進や地域課題の発見する場所として運営された。

たがって、被災地でのカフェのモデルは、平常時の都市型コミュニティでも採用可能であると考えた。

以上、西巣鴨と市ノ坪の地域の類似性、被災地仮設住宅群と平時の都市型社会のコミュニティの共通性から、「集いの場」構築の社会実験としてコミュニティカフェを実践した。

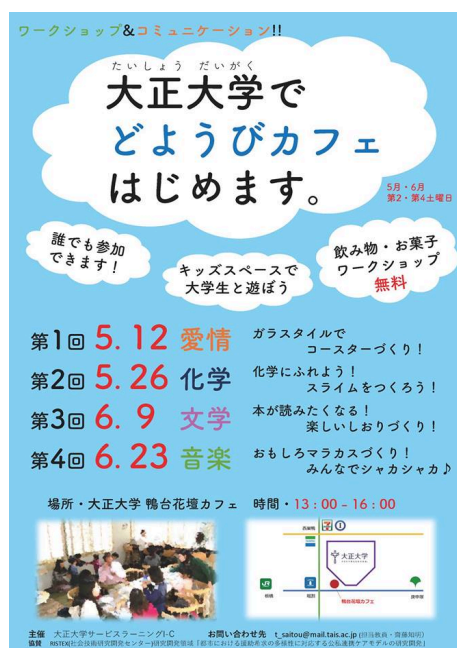
なお、本研究の実施にあたって、大正大学研究倫理委員会の承認を得た（承認番号：第17-018号）。

3. どうようびカフェ—西巣鴨での実践

大正大学のコミュニティカフェはこれまで、2017年11月～2018年1月（第1期）、2018年5月～6月（第2期）、2018年11月～2019年1月（第3期）に渡って計14回実施してきた。毎月第2第4土曜日に原則開催されることから、「どうようびカフェ」と命名して展開した。

事前調査において、大正大学がある西巣鴨と、西巣鴨に隣接する北区滝野川では、教育施設が点在し若い家族が多く住んでいるにも関わらず、週末に家族で遊べる施設や公園が少ないことがわかった。西巣鴨における援助希求を「家族が安価で遊べる集いの場の創出」と把握し、園児や小学生がいる家族をターゲットとして、ワークショップ

写真－1 どうようびカフェのポスター（第2期）



で楽しんでもらえるコミュニティカフェを実施することにした。また、コミュニティカフェである以上、単なるカフェ営業ではなく、学生と地域住民が対話を通じて交流する空間を提供することを重視した。

第1期では、ワークショップの材料費分として、料金を大人200円、学生100円と設定した（子供は無料）。一方、第2期と第3期は、料金設定でどのように客足や反応が異なるかの比較検討をするため、すべて無料として試行した。

事前の広報は全3期に渡って、ポスターを作成し鴨台花壇カフェに掲示した。ポスターを縮刷したフライヤーは主に保育園、幼稚園などの教育施設や区民ひろばなどの公共機関に配布した。第2期以降はどうようびカフェの公式LINEを作成し来場者に対して登録を促した。LINEではポスター完成時に概要の通知をするほか、開催日前日と開催時に来場してもらうよう案内を流した。

各回のワークショップの企画と準備は、サービ

写真－2 利用者と会話する学生スタッフ



写真－3 ワークショップの様子



スラーニングを受講する学生が担当した。受講生数に合わせてグループをつくり、1回5,000円程度の予算で可能なワークショップ等を企画させた。基本的に小物づくりが中心的な内容となったが、アニマルハントラリーや即席動画作品づくりは、履修学生が専攻している知識や技術を応用する企画であった。また、スライムづくりや水をつかむ実験は小学生の学習要素を含むよう展開された。

どうぶカフェの実践にあたっては、「受付」「サービス」「キッズスペース」「ワークショップ」と担当を分けた（履修人数が多かった第3期は、「ゲーム」「案内・警備」が加わった）。また、普段は鴨台花壇カフェの営業とは異なることを知らせるために、どうぶカフェ専用の看板を掲示して来場を促した。飲み物は既製品のコーヒー、紅茶、ジュースなど、食べ物は包装されたお菓子を提供した。

来場者の多くは、親子連れか子供同士であった。ワークショップを一緒に体験する親子、カフェ内に設置したキッズスペースで子供と大学生が遊んでいるのを横目にゆったりとした時間を過ごす母親、大学生とともに体を使ったゲームに夢中にな

る小学生など。また一方で、高齢者が一人あるいは二人ほどで訪れることもあった。その多くは、歩いている途中に通りかかって少しの時間休憩することが目的であった。いずれにせよ、どの年代の来場者に対しても学生たちは、どうぶカフェの趣旨を話したり、なぜこのお店に立ち寄ったかなどを聞いたりするなど、密にコミュニケーションをとることに努めた。

実施第1回から来場者に質問紙調査の協力をお願いしている。それにより、来場回数、満足度、今後どうぶカフェに求めること等の情報を収集し、カフェ活動の改善や大学周辺地域における援助希求を分析した。

開始したばかりであり、有料だった第1期では来場者が40人を超えることはなかった。しかし、第2期以降はリピーターの定着がみられ、来場者数が倍増した。第3期においては、天候や気温に来場者数が左右されることはありながらも、来場者数は安定した数字を推移している（表-1参照）。また、質問紙調査の内容や対話のなかからも、来場者間の口コミ等でどうぶカフェの認知度や満足度が向上していることを実感した。

表-1 どうぶカフェの開催記録

実施期	実施回	開催日	テーマ	ワークショップ	来場者数
1	1	2017/11/25	図工	写真立てづくり	38名
	2	12/9	感謝	シェルオーナメントづくり	37名
	3	12/23	円相	クリスマスリースづくり	37名
	4	2018/1/20	探検	アニマルハントラリー	38名
	5	1/27	記憶	即席動画作品づくり	28名
2	6	5/12	愛情	コースターづくり	69名
	7	5/26	化学	スライムづくり	81名
	8	6/9	文学	しおりづくり	61名
	9	6/23	音楽	マラカスづくり	53名
3	10	11/24	縁日	ゲームラリー	62名
	11	12/8	色彩	水をつかむ実験	72名
	12	12/23	Xmas	スノードームづくり	75名
	13	2019/1/12	正月	かるたづくり	60名
	14	1/26	節分	鬼のお面づくり	66名

質問紙調査の結果をみると、第2期以降、複数回来場したことがあると答えた方は4割近い。親子で来場した場合、親のみ質問紙に記入してもらっているため、あるいは子供だけの来場の場合も質問紙調査を実施していないため、実際には来場者の8割ほどがリピーターである。性別は全3期に渡って、女性が7割以上を占めている。住まいも全3期変わらず、8割が大学周辺（豊島区か北区）であった。

自由記述欄で最も多かった回答としては、「子どもたちが楽しめてよかった」、次いで「休日に遊べる環境を提供してもらいありがたい」といった趣旨のものであった。また、第3期には1年間以上、継続的に交流したこともあり、「子供が大学生との交流するのを楽しみにしている」「ぜひ今後も続けてほしい」といった内容の記述もあった。

これを裏付けるかのように第3期に至っては、学生と子供が個別の名前で呼び合う場面も見られた。第2期以降コミュニケーションを取りやすくするために、学生は毎回ネームタグをつけ、子供達にも受付で名前が書かれたシールを貼るようにしていた。このように「顔が見えた上で名前を呼び合う関係性（非匿名性）」が構築されたことにより、西巢鴨におけるどうぶつカフェの定着が成功したといえよう。言い換えれば、「大正大学の学生」と「大学周辺に住む親子」の多属性・多世代で構成された私領域の「集いの場」が構築されたことを示している。

4. 市ノ坪コミュニティカフェー川崎での実践

対象地域とした川崎市中原区市ノ坪には、大正大学の施設があるわけでもなく、大学と人の交流があるわけでもない。物理的資源と人的資源がない中でコミュニティカフェの立ち上げは、地域住民の理解と協力が必須である。そのため、開催に至るまで、多くの調整を必要とした。

筆者らが、最初に市ノ坪を訪れたのは、2018年1月のことで、近隣の木月住吉神社の吉田勲氏（禰宜）の紹介で、市ノ坪上町会的美坂孝夫氏（会長）、鈴木邦宏氏（副会長、民生委員）、小久保佳枝氏

（女性部役員）、金子美恵子氏（女性部役員）の4名に聞き取り調査を行った³。

聞き取りでは、地域の課題として高齢化が進んでいること、祭りへの子どもの参加は増えているが大人の町会参加が減っていることなどが明らかになった。現在、「体操の集い」という高齢者向けの集いを神社の境内で開催しているものの、見守り活動やコミュニティ活動はとくに意識してやっているわけではなく、そういった場に来ない人／来られない人をどう誘うか、さらには若い世代に町会への参加をどう促すかがこれからの課題であるとされた。

そこで、町会会館でコミュニティカフェを開催することを提案し、これまでと異なるイベントを通じて新たな地域住民参加の場を創出することをめざした。

とくに、意欲があり主体的な参加が見込める女性部の方々とは協議を重ね、女性部食事会での仏教講座などを開催したり、西巢鴨でおこなったコミュニティカフェに足を運んでいただいたりと相互交流を深め、約9か月かけて地域の信頼を得た上でカフェの開催に至った。

紙幅の都合上、詳細は割愛するが、この調整には、かなりの時間と労力をかけた。しかし、これは地域に拠点を持たないものが、その地域で活動を行うための必要なコストともいえる。すなわち、

写真－4 市ノ坪神社（左）境内に建つ町会会館（右）



³ 吉田氏は、当該町会にある市ノ坪神社も兼務しており、この神社の境内には社務所と併設するかたちで町会会館が設置されている。なお、市ノ坪地域には、市ノ坪上町会のほか、5つの町会（市ノ坪仲町会、市ノ坪本町会、市ノ坪南町会、市ノ坪自治会、市ノ坪住宅管理組合）があるが、市ノ坪上町会のみが町会会館を持っている。

地域外から地域内に何らかの働きかけを行おうとする際に生じる必要コストであろう。

さて、「市ノ坪コミュニティカフェ」と名付けられたこのコミュニティカフェは、2018年10月6日、11月10日、12月8日の計3回、14時～16時の間に開催された。いずれも土曜の午後の時間帯であるが、開催日時を決めるにあたっては、会場となる町会会館の予定を確認し、町会長の許可を得て借用することができた。

市ノ坪での実践は、実験的な運営であったため、どういうワークショップが好まれるのか、3つのタイプに分け実施した。ひとつは、〈レクチャー型〉で、講師の話を聞いて茶話会を行うものである。参加者は、事前準備も必要とせず、会場に集まればよい。参加のハードルが最も低いタイプである。

次に、〈共同作業型〉で、ゲームや制作物を通して、参加者同士が会話しながら、共同で作業することで、コミュニケーションを深めるというワークショップである。

最後に、〈ものづくり型〉で、参加者は個々に物を作りながら、その後茶話会を行う。このタイプは、個別作業が中心となるため、開催時間中に来ればいつでも参加できる。西巢鴨のどようびカフェで最も多く実践されてきたタイプである。

上記の分類に従って、10月6日は〈レクチャー型〉、11月10日は〈共同作業型〉、12月8日は〈ものづくり型〉のワークショップを開催した。いずれも参加費は無料で、茶話会には茶菓の提供を行った。

なお、開催にあたって、町内会の掲示板や町会女性部のネットワークを利用した広報を行ったほか、SNSを利用し特設ページを開設し、インターネット上での広報も行った。

以下、それぞれの内容について紹介する。

10月6日の〈レクチャー型〉ワークショップでは、東京都長寿医療センター研究所の岡村毅氏（精神科医）を招き、「この町で上手に歳を重ねるために」と題した、ミニレクチャーと茶話会を実施した。レクチャーの内容は、認知症に関する様々な知識や予防方法のほか、最近の潮流として認知症になっても住み慣れた場所で暮らせる地域づくりが注目されていることなどが伝えられた。

参加者は、町会女性部を中心に10名ほどであったが、市ノ坪地域、隣接する今井地域のほかに、荏宿地域からも参加があり、町会の範囲を超えた地域住民が集う場となった。また、参加者の年齢層も高く、当事者意識を持つ人、あるいは介護経

写真－5 レクチャー型ワークショップの様子



験を有する人の参加が多くみられた。

11月10日の〈共同作業型〉ワークショップでは、「まわしよみ新聞」を実施した。まわしよみ新聞とは、新聞の切り抜きを利用したワークショップで、自己や他者の隠れた価値観を知ったり、情報リテラシーやコミュニケーション能力が身についたりするコミュニケーション・ツールとして、現在、多くの大学や、図書館、コミュニティ活動などで取り入れられている（陸奥賢2018）。

その内容は、①新聞を読み、気になった記事を数枚切り抜く、②切り抜いた記事を紹介し、選んだ理由（エピソード）を話す、③切り抜いた記事を再編集し壁新聞を作る、という3つの工程からなる。この工程を4人程度のグループで行うことで、自然とコミュニケーションが深まるというものである。

今回は、市ノ坪地域だけでなく、内容的にも若い年齢層の参加を見込んで、地域間、世代間交流をめざすワークショップとして位置付けた。また、前回（10月6日）のコミュニティカフェの際に、今回のチラシを用意し、参加者に配布するとともに、町会会館の入り口に設置した。さらに、当日は町会会館の入り口に、コミュニティカフェの掲示をすることで、外からでも何をやっているかがわかるような雰囲気づくりも行った。

当日の参加者は10名ほどで、地域外からの参加はなかったものの、大正大学の学生が参加したことで、参加者の年齢層の幅が広がり、多世代交流の場となった。ワークショップ後には、「手軽なわりに話が盛り上がった」との感想があった一方、「新聞だと字が読みにくく、お年寄りにはハードルが高い」という声もあった。

12月8日の〈ものづくり型〉ワークショップでは、松かさ（松ぼっくり）を色塗りし、モールやビーズで飾りつけることで小さなクリスマスツリーを作成した。さらに、ツリーづくりが難しそうな子どもや、完成し終わって手持ち無沙汰になった子ども用に、クリスマスにちなんだ、雪だるまやサンタクロースなどの塗り絵も用意した。子ども向けの企画にすることで、子育て世代まで対象を拡大し、多世代交流を生み出すことをめざした。

当日の参加者は14名ほどで、そのうち6名が子どもであった。これは、ワークショップの対象が子ども向けであったこともあるが、前回（11月10

写真－6 配布したチラシ（A6サイズ）



写真－7 共同作業型ワークショップの様子



日）に参加した町会長が町内の子ども会に案内をしてくださったということも影響している。また、前回同様、町会会館の入り口を飾り付け、看板を作成したことで、他地域に住む親子の飛び入り参加にもつながった。

参加者からは、「子どもと作ってみたいと思っていたので楽しく参加できた」「町内住民ではないが、こういう地域のイベントが好きなので楽しかった」「次もあればぜひ来たい」といったポジティブな感想があり、コミュニティカフェのニーズも感じられた。

各回で実施したアンケートから、第1回と第2回では、60歳から70歳の参加者が多数を占めていたのに対し、第3回は若い親子の参加も見られたこと、参加者は総じて市ノ坪地域の方が中心だったが、荻宿、小田中、今井などの他地域の住民の参加もあったこと、また、女性が多数を占めていたことが明らかになった。

参加経路については、市ノ坪では地域住民間で

写真－8 ものづくり型ワークショップの様子



写真－9 松ぼっくりクリスマスツリー



のネットワーク（連絡網、口コミによる紹介）を通しての参加が主な経路であった一方、他地域からは、市ノ坪上町内会の掲示板を通しての参加もみられた。

月に1度、計3回という期間ではあったが、地域住民のネットワークを活用することで、住民のニーズを模索しながら、異なるテーマでカフェを開催することができた。

西巢鴨での実践に比べ、参加者数は少なかったものの、テーマやイベントでの楽しみを共有することで、これまで接点のなかった住民同士が交流できる可能性も感じられた。

物理的、人的資源を持たない場所での「集いの場」創出には、地域住民や自治会・町内会などの理解と協力がいかに得られるかが重要であると同時に、既存の組織が持つネットワークの強さは、地域福祉の資源としても援用可能であることが示唆された。

5. むすびにかえて

筆者らは、2地域での実践を通して得られた知見から、コミュニティカフェの運営の手引き（リーフレット）を作成し、配布した（写真-10）。これは、本研究が社会実装をめざすものであり、だれもが実践できるように知識の共有を進めるためである。

リーフレットは、一般向けに作成したため、できるだけ平易な文章を心がけた。したがって、そこに記述しきれなかった学術的に重要な知見は、以下にまとめる。

写真-10 リーフレット「コミュニティカフェの作り方」



（1）楽しさや居心地の良さの共有

コミュニティカフェは、異なる世代の人が、楽しさを共有することで、自然とコミュニケーションが深まる。問題意識が共通している人同士は、顔を合わせた際、会話が発展しやすい。また、楽しさを感じた人は継続して参加する傾向にあるし、さらには口コミでの情報発信も行ってくれる。そのためには、対象の設定と、対象にあわせたワークショップの企画が重要になる。

あわせて、キッズスペースの設置やレクリエーションや塗り絵などを用意するなど、ワークショップのメインコンテンツの他に、サブ・コンテンツ（暇つぶし）があると、参加者の多様なニーズに応えることができる。

（2）情報伝達経路の確認

市ノ坪でのコミュニティカフェでは、参加者の多くが、地域住民間でのネットワーク（連絡網、口コミ）によって情報を得ていた。その他、町内会の掲示板と、会館に設置したチラシを見て知った参加者もいた。しかし、顔の見える関係性からの口コミが最も効果があることが分かった。

一方、西巢鴨では、幼稚園や保育園など子どもが集う場所へ広報することで、子ども経由で家族の参加を促すことができた。

したがって、対象に適した経路を探し出す必要がある。町内会の掲示板での伝達が若年層にあまり効果がない一方、SNSでの発信が高齢者に届かないのも、対象と経路のミスマッチからくるものである。しかし、いずれの経路で参加しても、コミュニティカフェ自体に楽しさや居心地の良さを感じてもらえれば、継続して参加してもらえる傾向にある。

（3）地域との信頼関係の構築

どれだけ良いワークショップを企画したとしても、また、情報が伝わっていたとしても、運営団体に対する信頼がなければ人は集まらない。

この点に関して、市ノ坪では、時間をかけて町会の信頼を得たことで、会場の借用から広報まで多くの協力をいただいた。一方、西巢鴨では大正大学のこれまでの地域貢献の実績と、コミュニテ

ィカフェの継続性から活動への信頼性を得た。

この中でも継続性はとくに重要で、活動を重ねることで、運営者と参加者、参加者と参加者の間で、顔見知りの関係性が構築される。市ノ坪では3か月にわたって実践する中で、認識され、定着してきた感があった。西巣鴨のように、10回以上開催していたら、地域住民のコミットメントはより深いものになっていただろう。

「集いの場」における非匿名性は、みまもり機能の付与にもつながる。このステップが深まると、世代交流、地域交流の場としてのコミュニティカフェが、援助希求の早期発見の場としてのコミュニティカフェへと発展する可能性を持つ。

以上、実践を通じてコミュニティカフェ成立の要素とその可能性を示した。

地域包括ケアシステムを支える私領域の活動と

して、地域住民の相互交流を生み出し、援助希求を発見する「集いの場」は、今後ますます必要となるだろう。

本研究で示したように、コミュニティカフェはその「集いの場」になる可能性を持つものである。他方、年々加入率が下がる自治会、町内会にとっても、新たな地域住民の参加を促す機会ともなる。多様な住民参加を促す地域づくりのひとつとして、楽しさや居心地の良さを備えたコミュニティカフェが果たしうる役割は大きい。

謝辞

本研究の実施にあたって、市ノ坪上町会にご協力をいただいた。とくに、会長の美坂孝夫氏、女性部長の川口親子氏には、会場の借用、地域への情報共有など多大なご助力を賜った。ここに記して感謝の意を表す。ありがとうございました。

参考文献

- 1) 倉持香苗.『コミュニティカフェと地域社会—支え合う関係を構築するソーシャルワーク実践』明石書店、2014.
- 2) 齋藤知明.「福音系キリスト教会の支援活動」星野英紀・弓山達也編『東日本大震災後の宗教とコミュニティ』ハーベスト社、2019.
- 3) 高瀬頭功.「都市型コミュニティにおける地域課題とその対応—援助希求の発見に寄与するFB0の活動—」『地域構想』2018a.
- 4) 高瀬頭功.「都市における宗教施設による地域活動の実態」『宗教研究』92（別冊）、pp.132—133、2018b.
- 5) 高瀬頭功・小川有閑.「浄土宗青年僧侶による復興支援とそれを支える力」星野英紀・弓山達也編『東日本大震災後の宗教とコミュニティ』ハーベスト社、2019.
- 6) 陸奥賢.『まわしよみ新聞を作ろう!』創元社、2018.
- 7) 山内納.『つながるカフェーコミュニティの〈場〉をつくる方法』学芸出版社、2016.